

## E・ベルツの病理各論講義について

安井 広

名古屋大学医学部図書館にベルツの病理各論の講義録が二冊ある。一冊は奈良坂源一郎（明治十四年帝国大学医科大學卒、同年十月愛知医学校解剖学教諭）のもので一八七九年（明治十二年）とあり、他の一冊は川原汎（同明治十六年卒、同年内科教諭）のもので、一八八〇〜一八八一とある。この方は印刷本で、病理総論と同様に同盟社のものである。奈良坂の書（以下Nと略す）は呼吸器、循環器、消化器、泌尿器の病気を記し、川原の書（以下Kと略す）は伝染病、栄養障害、消化器病、泌尿器病を記す。ともに完全なものではなく、神経病はどちらにも欠けている。あるいはそれぞれが二巻のうちの一巻かとも思われる。N、Kともに目次を欠くが、総論と違い、章節の切れ目は整っており、誤植も少ない。Kには一ページおき書きこみができよう余白となっている。

これらの内容は一八八二年（明治十五）に刊行された『内科病論』と全く同じで、つまり『内科病論』（以下『病論』と略す）はこの『病理各論』を和訳したものである。

病理各論にそれぞれの病気の原因、病理解剖所見だけでなく、症状、治療法まで記載しているのは、ベルツの書に限らず、三宅秀の書もそうであり、Wunderlich, Strümpell, Kraus U. Brugsch の書はどれも書名が *Specielle Pathologie und Therapie* となっている。『病論』が『病理各論』の訳文であることは、当時病理各論の講義は内容的には今日の内科各論に相当するものであったからである。

まずKについて伝染病をみる。初めに伝染病総論があって、すべて伝染病はウイルス（『病論』に「毒」と訳しているが広く病原微生物の意）によって発生するとする。ウイルスは一定の機会を得て繁殖する性質を持ち、各伝染病には固有のウイルスがある。体内で成熟してからこれを他人に伝染さす触接伝染毒 *Contagium* と、体外で増殖して人体に侵入する瘴気毒 *Miasma* とがある。触接伝染毒は直接人から人へ伝染するほかに衣服などを介してするものもある。これに固形性と揮発性とあり、梅毒の毒は固形性で、

麻疹、猩紅熱は揮発性である。痘瘡毒には固形、揮発両性があるという。瘴氣毒にはマラリア、脚氣などの病原があるが、瘴氣毒性触接伝染病というのは、体内に発生した毒が外に出てから発育成熟して人に伝染するに至るものである。腸チフス、赤痢、コレラなどがこれに属する。当時漸く回帰熱、脾脱疽の病原体が発見された程度で、多くの病原はまだ発見されず、ただ感染様式からいろいろに推論された仮説である。

伝染病に対して感受性を持たない素因 Disposition を免厄質という。

一般栄養障害には十五の病名をあげているが、これらは現代では血液病、代謝病などにいれられる。

壊血病が新鮮野菜の欠乏によっておこることは経験的に知られていた。血友病については遺伝関係を述べ、日本にまれなことはまだ述べていない。白血病には脾性、水脈性(リンパ性)、骨髓性の三種があるとす。

付録にアディソン病、バゼドウ病、河川熱(洪水熱ともいい、ツツガ虫病のこと)の三者をあげている。河川熱には十ページを費して述べているが一八八一年新潟県に滞在し

て研究し、翌一八八二年にウィルヒョウ宝函に載せた、ベルツが日本に来て最初に発表した業績である。

消化器病に口腔、咽頭および軟口蓋、食道、胃、腸、腹膜、肝臓、胆管、脾臓の諸病をあげている。咽頭を消化器とするのは当時の医書に共通である。食道病のあとに下腹診断法の一章が設けられている。

呼吸器病と循環器病はNによった。ここには咽頭病はない。肺諸病には十二種があげてある。

粟粒結核は乾酪様変性を来たした物質が吸収されて各臓器に沈着しておけるといい、これを自体伝染 Selbstinfection と称している。最初は肺勞から続発する場合が多いという。

肺勞は遺伝に属する病気で、遺伝性の腺病質が肺勞の素因となるという。しかし一定度の触接伝染性を有すとも言っている。

泌尿器病では腎臟生理の中で、日本人のクロールナトリウム排泄量が多く一日三十グラムに達すると言っている。そのほか病的尿に血尿、血色素尿、タン白尿等のほか人血糸状虫による乳糜尿をあげている。

腎臓の炎症をブライト病と称し、急性腎炎、慢性腫大腎、萎縮腎の三期に分けている。ほかに遊走腎、腎盂炎、腎石、腎結核等を述べているが、ネフローゼは全く記述がない。

(愛知県幡豆郡)

アムステルダム植民地博覧会(一八八三) 医学部門に参加した日本とその展示品の日本四一病院見取図について

○石田純郎 H・ボイケルス

ロンドン水晶宮での一八五一年の博覧会以来、ほぼ五年毎に万国博覧会は開催された。万国博は、参加国の経済的、技術的または文化的発展を誇示し、産業博覧会として特徴づけられる。一八八〇年夏より、アムステルダムの有力実業家達は、万国博のアムステルダム開催を計画した。オランダの工業の停滞について認識していたので、産業博覧会ではなく、テーマを「世界の植民地と輸出品」と定め、一八八三年の五月から十月まで、半分完成していた国立博物館裏を会場として博覧会は開催された。

オランダ医学会の指導で、この植民地博覧会は、医学部門も含まれた。委員会はアムステルダム大学医学部 B.J. Stokvis 教授を委員長とし、協力した。この委員会は、一